

あまの仕事について

—新規就業を目指す方へのメッセージ—

東安房漁業協同組合 白浜町あま連絡協議会

平野 美乃

1. 地域の概要

私が住む南房総市白浜町は、房総半島の最南端に位置し、冬でも花が咲き誇る温かな気候に恵まれている（図1）。また、東西に伸びる海岸線は砂浜域と岩礁域が入り交じり、雄大な自然美を形成し、岩礁域には豊かな藻場も育まれている。

主な産業は、自然環境を活かした、アワビなどの磯根漁業と花卉や野菜栽培などの農業で、それらの地域資源を活用した観光業も盛んである。



図1 南房総市白浜町の位置
(黒塗りの範囲が白浜町)

2. 漁業の概要

私は東安房漁業協同組合の下部組織である白浜町あま連絡協議会に所属し、あま漁業を営んでいる。

白浜町の主な漁業は、アワビやサザエを獲るあま漁業、イセエビを獲る刺し網

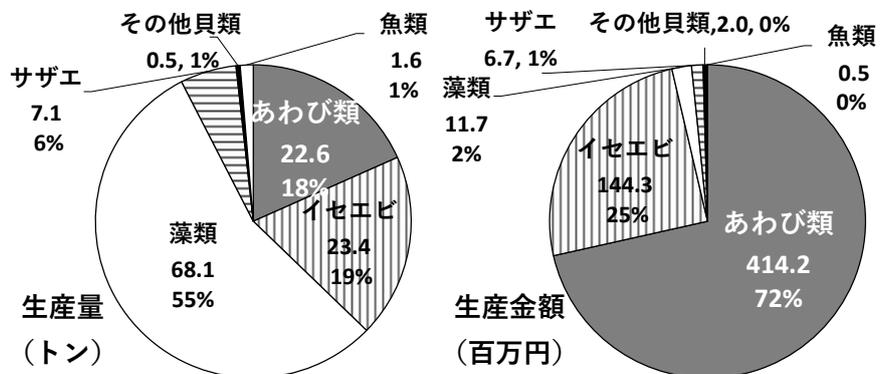


図2 令和4年度の白浜町における生産状況

漁業、ヒジキやハバノリを採る採藻漁業である。令和4年度における主な魚種の生産状況は、図2のとおりで、アワビは生産金額に占める割合が72%と高くなっている。また、豊かな藻場から生産される白浜町のアワビの品質は、市場での評価が高く、特にクロアワビは「房州黒あわび」として、千葉ブランド水産物にも認定されている。

あま漁業の操業期間は5月から9月上旬までのおよそ4か月間であるが、操業できる日数は海が穏やかな30日間程度である。あまの漁期中は、あまを専業とする者が多く、漁期外には農業、イセエビの刺し網漁業、自営業、アルバイトなど様々な仕事に就いている。

私は漁期中には専業であるが、漁期外にはイチゴ農園でアルバイトをしている。

あまの操業は、水深3～10m程度の海底まで一気に潜り、岩場に隠れているアワビを見つけ、磯がねで傷をつけないように漁獲する(図3)。潜水には水圧に体を順応させる耳抜きを行う必要がある。また、体力の消耗が激しいので、まげ樽を浮き輪替わりにして、海面で休憩する。さらに、上下に分かれたウェットスーツを着ていても、体は冷えていくので、海から上がって暖を取り、体力を回復させてから再び海へ向かう。このようにあま漁業は身一つで行える半面、体を酷使する。



図3 あまの道具
(→: 磯がね、⇒: まげ樽)

また、あま漁業は一見、個人の漁業と思われるが、漁港やあま小屋の管理はもとより、漁場の管理についても共同で行う作業が多い。

現在、白浜町の地先では、種苗生産されたアワビの稚貝を有効利用するため、平板やU字溝を投入して造成した4か所の漁場へ、毎年1か所ずつ稚貝を放流し、放流後の4年目でアワビを回収する輪採漁場を運営している。その管理には作業を効率的に行うため、スクーバ潜水の技術を有する者が複数人、他の作業にも大勢の人手が必要になる。また、密漁監視は海辺に住むあま達が目を光らせ、組合や地元の警察と連携している。

3. 研究・実践活動取組課題選定の動機

白浜町のあま漁業者は高齢化している。当町の令和4年度におけるあまの漁業者数は217人であり、その年齢構成は60歳以上のベテラン世代が全体の65%と多く、30歳代以下の若い世代はわずか6%となっている(図4)。また、館山水産事務所が令和元年に実施したアンケート結果では、後継者がいるあまは7%であった。

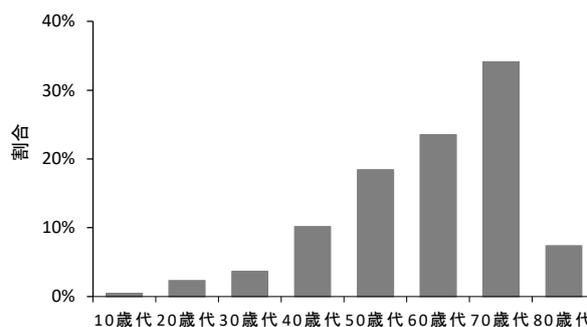


図4 白浜町におけるあま漁業者の年齢別構成

以上のことから、漁業者の急激な減少が見込まれるので、漁場管理がおろそかになる心配がある。

一方、都市部で暮らしている人や地元の子供達の中にも、海や自然と向き合いながら仕事をしたい人もいるはずである。そのような人が白浜町に定着し、あま漁業を支える

一員になるように行動することは、課題を解決する1つの方法だと思う。

そこで、就業を目指している人達に、技術習得やあま達との繋がりなど、私が経験してきたことを伝えることで、新規就業の手助けになれば良いと考えている。

4. 研究・実践活動状況及び成果

(1) あまになるきっかけ

白浜町で3人の子育てをする中で、夏に家の目の前にある磯でよく遊んでいた。それを知ってのことなのか、親戚のあまさんから、突然まげ樽をもらい、「海が好きだったら、こーよ（おいでよ）。1人で潜っていると危ねーからあま小屋こうさー（来なよ）」と声をかけられた。ちょっと興味があったので、家族に相談すると「お母ちゃん、あまさんになるの？そしたら、毎日貝が食べられるの？」と子供達は、嬉しそうにはしゃいでいた。家族の応援もあり、子供の喜ぶ顔が見たい、潜って海の中を見てみたいという気持ちになり、あまの道へ踏み出した。

(2) あまへの道

あまは今までと違う世界で驚きの連続であった。先輩たちの教えを受けながら、まずはまげ樽から真下へ潜る練習から始まり、初めて入った海は、真っ暗で何も見えなかった。まず怖いと感じ、自分の身長の高さですら潜れない。寒いし、波に揺られて気持ち悪いし、最初は30分も海に入っていられなかった。海から上がりあま小屋で薪を焚いて火で身体を温めることも初めてのことで、とても熱く煙たくて目が開けられなかったことを覚えている。

そして、潜っても何も獲れない日々は続き、寒さと波の揺れで、酔い止めを飲んでいても吐いてしまう毎日であった。やっと底まで潜ることが出来てサザエが1個獲れた時には感動したが、ほとんどは苦しくて、上がる途中で掴んだ天草を家の庭に干す毎日であった。

全然思いどおりにならずに落ち込んでいると先輩が、「どんなに辛くても獲れなくても海を絶対に悪く言ったり、嫌いになったらダメだど(ダメだぞ)。海には、常に感謝の気持ちをもって潜んねえば、おいねーよ(潜らなければいけない)」と声をかけてくれた。あま小屋に代々伝わる教えは、今も私の教訓になっている。

あまになって5年が経った頃、子供も学校に通うようになったので、本格的にあまに専念できると考えていたが、白浜町は交通の便が悪く、私が車で学校や習い事に送迎しなければならなかった。家事の時間も考えるとあまに専念する時間は取れず、また、まだまだあまでの収入は見込めなかったため、毎月決まった収入を得られる短時間のパート勤めも

始めることにした。

パートへ出ると年間 10 日間くらいしか潜れないので、あまとしての技術はなかなか上達しなかった。パートをしている間も「あまに専念したい」というもどかしい気持ちがあった。

「上達するには、もっと潜って経験を積まないと」と先輩に言われ続けて 5 年が経った頃、パート先のホテルの閉館が決まったことや子供達も大きくなり、家族から家事を助けてもらうことで、あま一本の道へ戻ることにした。

そこからは、あまに専念することで、毎年少しずつ深く潜れるようになり、今では水深 8 m 付近も漁場にしている。あまになって 12 年目で、1 日 5 kg 程度のアワビやサザエを水揚げできるようになり、ようやく「職業はあまです」と胸を張って言えるようになった（図 5）。



図 5 あま漁の様子

(3) あまの技術

あまへの道から得られた技術をいくつか述べたいと思う。まず、潜水するときは、身の安全とアワビを獲ることだけを考える。肺全体へ空気を送り込むイメージでゆっくりと深く息を吸い込む。無駄な動きはせず、水圧がかかるため、耳抜きを頻繁に行う。そして、トラブルに対応できるように、息に余裕をもって海面へ戻る。また、アワビを見つける目を養うことも重要である。漁の後には体が冷えているので、必ず、あま小屋で火に当たり体力を回復させる。体をケアすることが、あまを長く続けるコツである。体質には個性があるので、素潜りの経験を重ねる中で、技術を身に付けることが求められる。

(4) 輪採漁場に関わることで

あまになって 13 年目に地元の仲間潜り（輪採漁場の管理組織）に加入し、その時に聞いたのは、「輪採漁場の管理にはスクーバ潜水技術が必要である。地区でその潜水が出来る人が 1 人しかいないから、潜水士の資格を取得してくれると助かる」とのことであった。

私は「少しずつ上達して自分の水揚げが増えればいいな」と考えていたが、その現状

を聞いて、「できることなら協力したい」と思い、潜水士の資格を取ることにした。決心したときには、既に漁期に入っていたので、潜った日の夜の試験勉強は、眠くて何度も同じところを読んでしまう始末で、朝早く起きて頑張るしかなかった。テキストは聞きなれない単語ばかりであったが、それでも必死に覚えて資格を取得した。免許証が届いたその日には、仲間潜りの会員と磯の資源を大切に守っていく責任感が芽生えたことを覚えている。

資格は取得できたものの、活動的な会員が男性である組織に女性の私が入り込むことに不安があった。不安の要素は、私に男性並みの体力がないこと、そして、この集団に馴染めるかどうかであった。しかし、その不安は活動に携わっていく中で解消されていった。「美乃さんは体力的に出来ることをやれば良い」と声を掛けてくれるので、出来ないことを後ろ向きに捉えることなく、出来ることをしっかりやるように心がけている（図6）。また、潜水作業の後には皆と昼食をとる機会を作ってくれたので、馴染むまでにあまり時間が掛らなかった。最近では、地区の会計を担当し、輪採漁場の場所変更の話合いにも参加するようになり、周りとの協調しながら生産活動に関わっている。

私にとって潜水士の資格が、あま漁業との向き合い方を変えるきっかけとなったが、女性に配慮してくれる仲間がいることが大きな支えになっている。そして、地区には新たな潜水士が加わり、男女各2人が有資格者となったことから、仲間潜りの体制が整いつつあることをうれしく思う。



図6 輪採漁場での潜水作業

(5) あまの魅力

アワビを立て続けに獲れるときがあり、人間の本能と言うべきなのか、狩りをしている興奮が得られることに、引き込まれている。

また、地区の仲間は愉快であり、団結力がある。このような仲間達と資源を管理しつつ、自らの努力と工夫次第で、漁獲量を増やせることにも魅力を感じている。

(6) 白浜海女まつり

海女まつりは、海の安全と豊漁を祈ると共に、海で犠牲になった方々を供養しており、昭和39年から続く県内最大の夜祭りで、「ちば文化資産」にも選定されている。まつりのメインイベント「海女の大夜泳（だいやえい）」では、昔の仕事着である白装束を着

て松明（たいまつ）を持ち、まげ樽に乗り、列になって皆で泳ぎながら夜の海に大きな輪を描く（図7）。

私は海女になり、先輩達のように伝統文化を継承し、地域に貢献していこうと決めて、15年前から参加している。定住して地域の一員として生活していくためには、この様な取組も重要だと考えている。

令和5年の海女まつりでは、ペースメーカーとしてトップを泳ぐという大役を任されることになった。とてもプレッシャーはあったが、大勢のお客さんの声援や、海の中から見る水中花火の綺麗さで、やり遂げた達成感でいっぱいになった。



図7 海女の大夜泳

5. 波及効果

わが家の子供達は、小さい頃から海に親しんでいて、母親があまであったこともあり、娘が高校生の時にあまになりたいと言い出した。大学生となった現在では、あまの時期になると一緒に操業しており、娘はこの時だけは、私に敬語で接するので、海をなめてはいけないという彼女なりの意思が伝わってくる。

娘が私の背中を見て海と親しんできたように、白浜町の子供達が磯根漁業の体験をする機会を増やすことが出来れば、大人になっても海の豊かさを忘れることなく、ひいては、あま漁業に就いてくれることも期待できるのではないかと思っている。

6. 今後の課題や計画と問題点

私の嫁ぎ先は、たまたま、あま漁業を行使できる権利があり、地元と繋がりがある環境であったため、スムーズに就業し、技術も習得することができた。しかし、これから新たにあまを目指す人は、漁場管理において協調性が求められることから、地元のあまとの繋がりを持つことが何よりも重要である。そのために、まずは、地元の行事等に積極的に参加し、顔を覚えてもらい、自分はあまになりたいという意思を伝える必要がある。同時に、先輩のあま達が、限りあるアワビ資源を絶やさぬよう、殻長制限や種苗放流などの資源管理を継続的に実施してきたことを学ばなければならない。このようにお互いのことを理解し、実践できれば、技術を習得する機会も得られ、数年後にはあまになることを認めてもらえるはずである。

また、受入れ側のあまは、中途半端な気持ちで就業を希望する者に時間を費やし、指導

することはない。今までに何人か地区外から移住し、あまになった方がいるが、例外なく、あまになるという強い気持ちを持ち、先輩との信頼関係を築いている。

現在、南房総市があまになりたい方を地域おこし協力隊員として募集し、隊員がまずは漁協職員の仕事を通じて、あまと交流し、信頼関係を築く取組を始めているが、良い取組であると感じる。また、取組の中では県の協力により、漁業法など関係法令の研修やスクーバ潜水の技術も学ぶことができるので、漁業に関する基礎的な知識や地域で必要とされる技術を習得できる内容になっている。

一方で、あま漁業の収入だけで生計を立てることは、一般的には難しいと思うので、イセエビの刺し網漁業や農業などの兼業を考えていく必要がある。

私が所属する地区では、輪採漁場の獲り上げや平板の積み直しの中で、素潜りやスクーバ潜水の経験を積んでもらえるよう協力している。

今後、新規就業を目指す方々には、私の就業を支援してくれた先輩達から受け継いできたことや私の経験が参考になればと思う。

最後に私は、今年であまになり 16 年になった。いい仲間と出会えたことで、水揚げも上がり感謝している。これからも仲間たちと力を合わせて海の資源を守り、白浜町のあま漁業を支えていきたいと思っている。